

厚労省の試算に疑義あり！

- 1、 老人の1割負担や若人(サラリーマン)の3割負担を実施した場合の医療費縮減効果をみるために用いている「長瀬式」は、エンピツをなめて作ったような原始的な推計式で、統計学的にほとんど無意味なものであること。
- 2、 第一の問題は、老人と若人の価格弾力性(負担を1割上げた場合の医療費の縮減の度合い)がほぼ同じとみていること。
内外の学者の計測では、老人の方が高い(若人の弾力性の1.5~2倍)ことで一致しており、これは、現場の経験からも明らか(老人は病院をサロンとしていたりするが、サラリーマンで好んで行く人はいない)。
- 3、 長瀬式は、 $y = a x^2 + (1 - a)$ という形で x^2 の関数になっている。これは、老人の0割 1割への影響より、若人の2割 3割への影響を大きくみる結果をもたらす。通常の推計式は、 $y = a x + b$ というように1次式で、そのようなことがないのが普通である。
- 4、 以上のようなことから、厚労省の「長瀬式」では、
 - 老人の1割負担の効果をより小さく
 - 若人の3割負担の効果をより大きくするようなバイアスがかかっていると思われる。
- 5、 老人1割負担の効果が現在の試算より、もっと大きいものとなれば、政管健保の財政は、もっと好転するはずである。

(以上)